

出雲市出身の順天堂大医学部教授、樋野興夫さん(60)は、全国各地で「がん哲学外来」を開いている。カ ルテもなく、ペンも持たず、必ずお茶を飲みながら、患者や家族と60分間ほど対話する外来。傾聴にとどまら

ず、樋野さんが患者の思索の「種」となるような言葉を贈るのが特徴で、それを「偉大なるお節介」と表現する。広島市内で開かれた講演会で樋野さんは繰り返した。「広島でも『偉大なるお節介』を」と。(平井敦子)

## 「八方塞がりでも天は開いている」「todoよりtobe」

「余計なお節介は人を傷つけますが、偉大なるお節介は大切です」と樋野さんは朗らかに語る。「偉大なる」のために必要なのは、がん患者の苦悩や気掛かりに耳を傾け、共感して接する姿勢。「外来から帰るとき顔が、来たときより和らいでいるかどうか」なのだという。

がん哲学外来は、2008年に順天堂大で開いたのを機に広がった。樋野さんはいま、お茶の水クリスチヤン・センター(東京都千代田区)や福島県立医科大学(福島市)などの7カ所にボランティアで定期的に通信、無料の外来を続けている。これまで約千組の患者や家族と対話してきた。外来の前半は、治療への不安や不満、家族との葛藤、生き方や死について、患者や家族の悩みに耳をすま

## がん哲学外来 樋野教授、広島で講演

### 苦悩や気掛かりに寄り添う

す。そのときに心掛けてい るのは「暇げな風貌」。悩みの核心をキヤッチするに は「脇を甘くして、付けいる隙を与えることが大事」と笑う。

そして後半は「対話なんですから私もしゃべりま す」。そのときに伝えるのは、不安や混乱から自分で自分自身を解放していくための「種」となる言葉だ。

「患者さんの問い掛けの多くは、治るかどうか分からない『グレーション』、つまり答えの出ない問題についてです。『なぜ、こんなこと』』『これからどうなるのか…』。医師が専門用語で説明しても答えにならない。分からないことは分からない。そんなとき、『生きる基軸』となる言葉がいるのです」

よく引き合いに出すのは次のような言葉だ。「たとえ明日、地球が減じるとしても、今日、この花に水を遣る」「八方塞がりでも天は開く」(SUNG todo) (何

をするか) よりも t o b e (存在) …。

「3時間待ちの3分診療」といわれる日本の医療。最高の医療を受けることができても、それだけでは患者さんの心は晴れない」と樋野さんは力を込める。同じ人間として同じ目線で対話する場が必要という。

そうした考え方に共鳴し、患者や家族、医療者がお茶を飲みながらゆったりと対話する「がん哲学外来」メディカル・カフェも、全国の病院や薬局などの約40カ所に広がっている。中国地方で開かれているのは、岡山大病院(岡山市北区、不定期開催)、国立療養所長島愛生園(瀬戸内市)、金田病院(真庭市)、島根大医学部付属病院(出雲市)の4カ所。「広島でも、ぜひカフェを」と、講演会に集まった患者や家族ら約80人に樋野さんは呼びかけた。

がん哲学外来のホームページで、<http://www.gantetsusaku.org/>



「たそけい」を難くして、話す樋野さん

「たそけい」を難くして、話す樋野さん (広島市中区)